

神殿の象徴

ジェイコブ・プラッシュ

ある人が私に聞きました。「神殿はいつ再建されるのですか」それはヘブライ大学の考古学者たちによって数年間にわたり発掘がなされているからです。同大学のカウフマン博士は、神殿の丘の地下で考古学的な調査を行いました。実際彼はその手に測定器を持って神殿の丘に行き、神殿を再建することを視野に入れていました。神殿を再建しようとする動きがあることは事実で、いずれ再建されないとしたら私はとても驚くでしょう。しかし、これはとても複雑な問題なので、理解するために最初から学び始めなければなりません。

“神殿”を指す言葉

“幕屋”や“神殿”を指す主要な単語はヘブライ語では少なくとも3つあり、ギリシア語でも3つ存在します。

まずヘブライ語では、幕屋あるいは宿る場所を意味する“ミシュカン (*mishkan*) ”、また家を意味する“ベイト (*beit*) ”、そして神殿を意味する“ヘイカル (*heikhal*) ”という言葉があります。それぞれの言葉が違った文脈の中で使われています。

そしてギリシア語はまず、単純に家を意味する“オイコス (*oikos*) ”、そして聖なる宮の意味を持つ“ナオス (*naos*) ”、また神殿を意味する“ヒエロン (*hieron*) ”という言葉があります。これらは違った文脈、違った箇所において新約聖書の中で使われています。

神殿や幕屋を理解するのに最も重要なことはそれが「神が宿る聖なる場所」であるということです。“シェキナー (*shekinah*) ”という言葉は聖霊について使われていて、雲と火の中に現れた聖霊のことを表しています。

シェキナーとはヘブライ語の“シェカン (*shekhan*) ”という語根から来た言葉で、ここからミシュカン (*mishkan*) という言葉が来ています。これは“神が宿る場所”という意味で神殿に関して使われている単語のひとつです。

幕屋

ヨハネ1章には『ことばは人となって、私たちの間に住まわれた』(ヨハネ1章14節)とあります。その住むというギリシア語は“カタスケノー (*kataskenoo*) ”という単語で、“幕屋を張る”という意味であり、ユダヤ人的な“宿る”という考えをほのめかしています。

少なくとも聖書の中には7つの主要な幕屋があります

最初の幕屋は私たちがヘブライ語で“ハ・オヘル (*ha ohel*) ”すなわち“会見の天幕”と呼ぶものです。それは移動式の幕屋で、任命されたレビ人たちが持ち運びできるように設計されていました。幕屋が夜に張られるとき、イスラエルの宿営は部族にしたがって幕屋を囲むような配置になりました（民数記 2 章 1 節－31 節）。

第二の幕屋はソロモンの建てた第二神殿です。

第三はゼルバベルの建てた神殿であって、後にヘロデ王がそれを拡張してからはヘロデの神殿と呼ばれました。実はヘロデは拡大するための青写真としてエゼキエル書の幻を用い、ギリシャ・ローマ風の建築様式とともにローマ人の関心を引こうとしました。

第四の神殿はエゼキエルが見たもので私が考える限り、千年王国の神殿です。

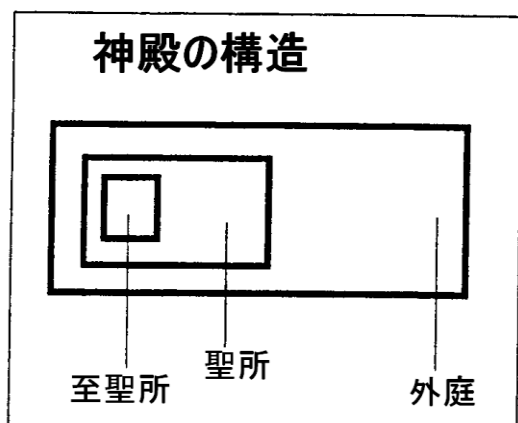
イエスは自分の物質的な体のことを神殿と呼びました（ヨハネ 2 章 19 節－21 節）。これが第五の神殿です。

第六の神殿また幕屋は私たちの体です。

『あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。』（1 コリント 3 章 16 節）

最後に第七の幕屋は教会です。新約聖書のうちで少なくとも七回——1 コリント 3 章 16 節・17 節・6 章 19 節、2 コリント 6 章 16 節、エペソ 2 章 21 節、黙示録 13 章 6 節・21 章 3 節——これらの箇所では教会は神の幕屋と呼ばれています。

それぞれの七つの幕屋が次のようなパターンに従います。ひとつの箱の中に箱があり、またその中に箱があるという構造です。最も奥にはヘブライ語で“ハ・コデシュ・コデシム (*ha kodesh kodeshim*) ”と呼ばれる至聖所があります。その外側には部屋があり、また三つ目の部屋があります。



『あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。』（1 コリント 6 章 19 節）

外庭または異邦人の庭は、私たちの物質的な体と関連しています。その部分はずべての人が見ることができ触れることができるものです。イエスの時代には外庭の内側の境界に「異邦人はこれ以上進んではならない」という警告が書かれていました。

次に聖所があります。聖所はレビ人がいけにえをささげるために入って行く場所です。

最も奥は至聖所、神の霊が宿る場所でした。

内なる人

この事柄を理解するのは重要です。もし外庭すなわち、すべての人が見ることができる場所が物質的な体なら、聖所は私たちのたましいを表しています。たましいは感情、意思、知性とで構成されています。ヘブライ語でたましいは“ネフェシュ (*nephesh*)”といます。たましいの内にはもうひとつの箱があって、これが霊であり、私たちの“内なる人”です。新約聖書は多くの場合霊を“心”として、旧約聖書は“腎臓”という単語を使って暗に示しています。

悪霊につかれたクリスチャン？

「クリスチャンでも悪霊につかれることがあるのですか？」これはよく聞かれる質問です。その答えはあなたの使う“悪霊につかれる”という言葉が何を意味しているかによります。

クリスチャンはその“外庭”において悪霊に影響を受けることはありえます。悪霊はクリスチャンたちの体を悩ますことができます。悪霊は私たちの感情や意思に影響を与えるでしょう。クリスチャンは悪霊に圧迫されることがあります。しかし、悪霊は内なる人に決して入っていくことができません。ただ救われていない人だけが悪霊につかれることがあります。そのような状態のときにだけ悪霊は聖霊の代わりに内なる人を支配することができるのです。聖書を信じるクリスチャンの内なる人に悪霊が入る唯一の機会、その人がどうしようもない状態まで墮落してしまったときです。サウル王がその一例でした。

残念なことにある人たちは「解放のミニストリー」に関わり、区別をせずにクリスチャンたちは悪霊につかれていると確信させてしまっています。悪霊に“圧迫されること”とそれに“つかれること”とは違います。信者に関してサタンはこれ以上入っていけないという限度があるのです。

隔ての壁

神殿は箱の中に箱があり、またその中に箱というパターンに従います。神殿の中には“隔ての壁”と呼ばれるものがありました。罪は分離をもたらすものです。隔ての壁の中で最も重要なのは聖所と至聖所の間にあった幕、イエスが十字架にかかったときに上から下に真っ

二つに裂けた幕です（マタイ 27 章 51 節）。

“隔ての壁”は祭司たちが入る場所、また男が入る場所、もうひとつは婦人の庭にありました。女と男はそこにある壁によって分離されていました。聖職者と男は壁で分離されていました。また大祭司と他の祭司は壁で分離されていたのです。そしてそれらの周りには隔ての壁がありユダヤ人と異邦人とを分離していました。

ユダヤ人と異邦人との壁、男と女との壁、聖職者と一般人との壁、普通の祭司と大祭司の間の壁、これらすべては聖なる神と汚れた人間の上に設けられた壁の結果なのです。

アブラハムの子孫

ユダヤ人は自分たちが特別だと考えていました。なぜなら彼らはアブラハムとの血がつながった子孫だったからです。バプテスマのヨハネは彼らに、神はアブラハムの子孫を石からでも起こすことができると言いました（マタイ 3 章 9 節）。彼はミドラッシュ的に、「神は異邦人信者（クリスチャン）を起こし、アブラハムの子孫にすることができる」と言っていたのです。

シュロの主日にユダヤ人たちは大声で「ダビデの子にホサナ！ホサナ！」と叫んでいました。

『するとパリサイ人のうちのある者たちが、群衆の中から、イエスに向かって、「先生。お弟子たちをしかってください。」と言った。イエスは答えて言われた。「わたしは、あなたがたに言います。もしこの人たちが黙れば、石が叫びます。』」（ルカ 19 章 39 節－40 節）

イエスさまが言おうとしていたのは「もしユダヤ人がわたしをメシアとして認めないのなら、クリスチャンたちがそうするであろう」ということだったのです。

固く組み合わされたレンガ

『あなたがたも生ける石として、霊の家に築き上げられなさい。そして、聖なる祭司として…』（1 ペテロ 2 章 5 節）

私たちがその石です。ヘブライ語での“交わり”という言葉は“カバール (*chabar*)”という動詞から来ています。“共に結合する”という意味です。共に組み合わされたレンガを表しています。教会に来るのはひとつのことです。しかし交わりに入るのはまた違ったことなのです。教会に来る人はひとときの間、他の人と一緒に座っているだけですが、交わりに入ったら私たちは固く結合します。

建物のあちらこちらにレンガが抜けているような状態は、人々がただ教会に来て交わりに入らないような状態と同じです。ただ教会に来るのと交わりに入るのには大きな差があります。

神の建物

『私たちは神の協力者であり、あなたがたは神の畑、神の建物です。』(1 コリント 3 章 9 節)

これはギリシア語の文ですがパウロはヘブライ語の“ビンヤン (*binyan*) ”「神が建てられたもの」という考え方をを用いています。私たちは神によって組み合わされたものであり神の建物です。また教会は神殿です。

エペソ人への手紙は新約聖書の中で、神殿を理解するのに最適な書といえます。

『こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、今は聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。この方にあつて、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、このキリストにあつて、あなたがたもともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。』(エペソ 2 章 19 節-22 節)

ギリシア語の宿るという意味の“スケノー (*skenoo*) ”という言葉は、ヘブライ語のミシュカンやシェキナーという言葉と派生した源は同じです。シェキナーは“霊である神”という意味です。

教会は神が宿る神殿となるべき場所であり、神殿は無くなったものではありません。神殿が存在しないとってはなりません。神殿は今も存在しています。

クリスチャンは石であつてイエスが礎の石、また預言者たちが土台をなしています。

シュロの主日にイエスに向かって歌われた詩篇 118 篇 22 節“ハレル・ラバー”を見てください。

『家を建てる者たちの捨てた石。それが礎の石になった』

イエスはこの神殿の礎の石であり預言者たちが土台をなし、私たちがその上に建てられています。

使徒たち

聖書には5種類の使徒たちがいます。使徒はヘブライ語で“ショラハ (*sholakh*)”といい、“遣わされて”教会を建て上げる者です。ギリシア語では“アポストロス (*apostolos*)”といい同じく“遣わされた者”という意味です。

第一に、イエスは“使徒”と呼ばれました（ヘブル3章1節）。定冠詞のついた遣わされた者という意味です。イエスは特別です。他の使徒的な権威はイエスから来なければなりません。

第二に、これもまた特別な十二使徒がいます。十二使徒は十二人の族長、すなわち旧約聖書のヤコブの十二人の子どもたちと関係があります。イスラエルのすべての人がヤコブの十二部族の子孫であったように、私たちもある意味で十二使徒の霊的な子孫となるのです。ドミティアヌス帝が建てたエルサレムの修道院にはパイのように切り分けられ、重なった3つの同心円があります。真ん中には十二の族長たち。その周りの円は十二使徒たちに関するものです。ここまでは良いのですが、三つ目の円を見ると一番外側は十二宮（星座）が書かれてあります！中東にあるローマ・カトリック教会の多くには啓蒙主義からの象徴が見られます。私はある人たちがしているように陰謀説には関わりを持ちませんが、それらの象徴に気付かずにはいられないことでしょう。

使徒たちは教会が建てられる基礎となりました。イエスは“使徒”であり、また十二の使徒たちがいました。実際パウロは元々の十二人が持っていたような条件を満たしていませんでしたが、パウロは使徒のうちで少しも劣っていないことを断言していました。パウロの持っていた権威は他の使徒たちと同等だったのです（2コリント11章5節）。

しかし、パウロが自分のことを最も小さい者だと言ったのは彼が教会を迫害したからです（1コリント15章9節）。

黙示録4章においては二十四人の長老が登場します。その長老たちは黙示録の中で二度ふれられています。その長老たちが十二人の族長と十二使徒ではないかと考えても不思議ではありません。二十四人とは永遠に固定された数でパウロはその一員ではないようです。

第三に、使徒たちがユダの代わりを探したときに、バプテスマのヨハネのときからともにいた者を選ばなければなりません（使徒1章15節-26節）。ヨハネは旧約新約間の時代の軸となる人物だったのです。

十二使徒の後ほぼ特別なケースともいえるパウロがいました。パウロは使徒たちと同じ権威を持つ者でしたが、必要条件をどう見ても満たしていませんでした——バプテスマのヨハネのときからともにいなかったからです。

第四に、私たちは1コリントの手紙で他の使徒たちがいたことを知っています。パウロはここで党派心の問題を扱っており、それを非難しながら言いました。『あなたがたはめいめいに、「私はパウロにつく」「私はアポロに」「私はケパに」「私はキリストにつく」と言っているということです。』（1コリント1章12節）

他に勝って特別なイエスがいます。また十二人のうちのひとりであるケパ（ペテロ）がい

ます。そしてパウロ。最後にアポロが出てきます。四つ目の分類です。アポロはパウロのようではなく、確実に十二人のうちには入っていませんが使徒たちのような奉仕をしていました。

第五に、今日存在するのは教会を開拓するという意味での使徒たちです。そのような人たちは牧師ではありません。いったん教会が立ち上がると、他の場所へ行きまた別の教会を開拓します。このような人たちはたいてい良い牧師ではありませんが、教会を開拓するのに特別に召された人たちです。

使徒的権威

エペソの手紙の文脈において礎石とは主に十二使徒とパウロ、初代教会で聖書を書いた使徒たち、また旧約聖書での預言者を意味しています。

同じことが次のことにも当てはまります。もし教会が開拓されたならその基礎は開拓した使徒にあるということです。その意味で使徒的な権威は存在しています。しかし思い出しみてください。新約聖書での使徒の持つ権威の主な目的は教理のためでした。

使徒たちが持っていたような形の権威は今日も存在しているでしょうか？答えは「イエス」です。それは新約聖書の中に存在しています。

使徒たちの教え、これが使徒的な権威なのです。それはくびきを重くすることではありません。「あなたはこれをして、あなたはあれをしなさい」と命令するというものではなく、その権威は教理についてのものでした。

復興主義を信じている人たちが自分たちに“使徒”という称号をつけるなら注意してください。その人たちは自分が基礎になるべきだと考えていて、他の誰にも与えられていない神のことばや聖霊の権威を持っていると思い込んでいるのです。今日存在する唯一の使徒たちとは教会を開拓する伝道者たちです。使徒たちが持っていたような権威は新約聖書の教理の中に今も保たれています。そしてその権威はいつも教理に関してのことであり、政治に関してではありませんでした。

第二に、使徒の権威とはいつも複数形であり、くびきを重くし指導者たちが自分のことを“使徒”と名乗っているような「ハウス・チャーチ」とは違ったものです。

聖霊は言いました。『バルナバとサウロをわたしのために聖別して、わたしが召した任務につかせなさい』（使徒 13 章 2 節）イエスは使徒たちをふたりずつ遣わしました（マルコ 6 章 7 節）。使徒の働きにおいて彼らがサマリヤで起こっていることを確認しようとしたとき、そこにふたりの使徒を遣わしました（使徒 8 章 14 節）。それだけではなく、使徒 15 章にある会議では相互に意見を出し合うことが認められていました。自分に“使徒”という称号を付けている人たちを警戒してください。これは「ハウス・チャーチ」の中にある考えで、残念ながらペンテコステ派にも入ってきてしまっています。これは聖書的な教えではありません。

キリストのからだ

『むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分はその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。』（エペソ 4 章 15 節－16 節）

エペソ人への手紙は建築学に使うような言葉と、解剖学またその構造に関して使われる言葉を混ぜて書かれています。私たちはキリストのからだ——骨や肉、目、足なのです。

『良い知らせを伝える者の足は山々の上であって、なんと美しいことよ。平和を告げ知らせ、幸いな良い知らせを伝え、救いを告げ知らせ、「あなたの神が王となる」とシオンに言う者の足は。』（イザヤ 52 章 7 節）

『良い知らせを伝える者の足は山々の上であって、なんと美しいことよ。』これがパウロがエペソ人への手紙で言っていたことです。『足には平和の福音の備えをはきなさい。』（エペソ 6 章 15 節）私たちはキリストのからだです。足とはどのような人なのでしょう？それは伝道者です。

『からだのあかりは、あなたの目です。目が健全なら、あなたの全身も明るい、しかし、目が悪いと、からだも暗くなります。』（ルカ 11 章 34 節）目は物を見定めます。目とは教師です。

良い行いをするのはとても重要なことです。しかしご存知でしょうか。新約聖書は正しい教理を持つことを、正しい行いについてより二倍多く勧めています。なぜでしょう？それは正しい教理を持っていなければ、何が正しい行いかを知ることはできないからです。

ダビデの幕屋

『この後、わたしは帰って来て、倒れたダビデの幕屋を建て直す。すなわち、廃墟と化した幕屋を建て直し、それを元どおりにする。それは、残った人々、すなわち、わたしの名で呼ばれる異邦人がみな、主を求めるようになるためである。大昔からこれらのことを知らせておられる主が、こう言われる。』（使徒 15 章 16 節－18 節）

この預言はアモス 9 章 11 節から取られました。

『この後、わたしは帰って来て、倒れたダビデの幕屋を建て直す。すなわち、廃墟と化し

た幕屋を建て直し、それを元どおりにする。』ソロモンによって神殿が建てられる前にあったダビデの幕屋とはシロにあった幕屋でした。ダビデの幕屋は移動式だったのです。それはたいていシロにありましたが、持ち運ぶことが出来ました。

アモスはダビデの幕屋が建て直されると預言しました。私たちは何らかの形で固定された建物から自由に動けるものへと移ります。

使徒 15 章の箇所とその文脈は、預言を成就したのが教会であると明らかにしています。教会はダビデの幕屋その機動性を再現しました。

使徒の権威の柱

『そして、私に与えられたこの恵みを認め、柱として重んじられているヤコブとケパとヨハネが、私とバルナバに、交わりのしるしとして右手を差し伸べました。それは、私たちが異邦人のところへ行き、彼らが割礼を受けた人々のところへ行くためです。』（ガラテヤ 2 章 9 節）

元々の十二使徒はパウロとバルナバが使徒の奉仕をすることを認めましたが、十二使徒自身は特別に“柱”と呼ばれていました。

神殿には二本の柱が建っていました。“ボアズ”と“ヤキン”という名の柱です（1 列王記 7 章 21 節）。ボアズとは“彼の力によって”という意味で、ヤキンとは“彼は確立する”また“ヤハウエは確立する”という意味です。柱は屋根を支えています。もし柱が倒れてしまえば屋根は落ちてきてしまいます。使徒の権威が無くなってしまえば、建物が崩壊してしまうことでしょう。

残念なことに使徒の権威は無くなりつつあります。それはなぜでしょうか？教会が使徒たちの教えから離れて、間違った使徒の権威を主張する復興主義者たちの神学へと陥ってしまったからです。

ここで気付いてほしいのですが、神殿に用いられたものはさまざまな種類のクリスチャンを表しているということです。

『勝利を得る者を、わたしの神の聖所の柱としよう。』（黙示録 3 章 12 節）

永遠の都には神殿はありません。そこにはイエスがおられるので幕屋だけがあります。すべての場所が幕屋となります。しかしそれは建物や神殿のようなものではありません。

先の聖書箇所は教会と関連している箇所です。なぜなら天には神殿は無いからです。幕屋は存在します。しかし神殿ではないのです（黙示録 21 章 22 節）。勝利を得る者は柱となります。

本当の使徒となり、教会の真の開拓者となるためには、あなたは何にもまして勝利を得る

者でなければならないのです。使徒たちの生涯を見てください。彼らはひどい反対や迫害、異端、裏切りに遭いましたがその中で勝利を得ました。

神殿を建てる

新約聖書はとても多くの場所で繰り返し、教会を幕屋として定義し、そのように見なしています。神は最初からいつでも幕屋を持っておられます。現在それは私たちのことです。

『イエスは彼らに答えて言われた。「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。』」（ヨハネ 2 章 19 節）

一方で教会はキリストのからだでもあります。イエスに起こったことは私たちにも起こるのです。

ヘブライ語の言葉はたいてい三つの文字によって構成されています。ときには二つのこともあります。たいていは三つでそれは“語根”を意味する“ショーレシュ (*shouresh*)”と呼ばれます。どんな単語でも二つの単語が同じ語根を持っていたなら語源的につながりがあり、多くの場合神学的にも関わりを持っています。

ホセアという名“ホシエ (*הושע*)”の語根はシン (*ש*) です。イザヤの名は“イシャヤフ (*ישעיה*)”であり、ヨシュアは“イエホシエ (*יהושע*)”、イエスは“イエシュア (*ישוע*)”です。ヘブライ語ではいつでも“シュ”の音があるときには、それは救いと何らかの関連があります。

『主は二日の後、私たちを生き返らせ、三日目に私たちを立ち上がらせる。私たちは、御前に生きるのだ。』（ホセア 6 章 2 節）

イエスの復活は、終わりの日に教会が経験することによって再現されます。イエスは言われました。『この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう』（ヨハネ 2 章 19 節）

それが彼の神殿——体に起こったことであり、同じことが私たちにも起こります。

私たちがマタイ 24 章を読むときにこれが非常に大切なこととなってきます。弟子たちがヘロデの神殿に目をみはっていたときにイエスは言われました。『ここでは、石がくずされずに、積まれたまま残ることは決してありません。』（マタイ 24 章 2 節）イエスは預言者ダニエルの預言を指して言われたのです。第二神殿が破壊される前にメシアは到来し死ななければなりません（ダニエル 9 章 26 節）。

神殿の崩壊は、終わりの時代に教会に対して起こることの予型でもあります。石はくずされますが後に栄光ある永遠の神殿として、イエスの体がよみがえったように私たちもよみ

がえります。私たちは神の御姿に似せて作られました。私たちの体は三つの部分でなっています。私たちを構成しているのは外庭と聖所、それ以至聖所です。なぜなら神が三位一体の神であるからです。イエスは神の原型です。私たちはイエスの御姿に作られています。イエスが神殿であり私たちも神殿なのです。

結婚と神殿の象徴

神殿の記述とそこにある象徴を理解したなら、神はなぜ結婚を聖なるものとして保ち、寢床を汚してはいけないと言われたかの意味が分かります。

あなたがクリスチャンであり妻がいるのなら、妻の体は聖霊の宮です。神の神殿に不遜には入ってはいけません。これは性欲をかきたてるなということでも、楽しむなということでもありません。その意味することは罪の汚れがあってはいけないということです。

結婚における性行為はある意味で大祭司が神殿に入るようなものであり、イエスが花嫁である教会の中に入り、教会を実り豊かにすることと同じことです。私たちは神の御姿に似せて作られています。性的に交わることは霊的なことを表しているのです。

『寢床を汚してはいけません』（ヘブル 13 章 4 節）『あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。』（1 コリント 6 章 19 節）ハシド派ユダヤ人たちはこの考え方を理解しています。彼らは夫婦が愛の営みをしているとき、ベッドの上にはシェキナーが宿っていると言います。ハシド派ユダヤ人はそこに霊的な側面があり、神の御霊がその上にとどまっていることを理解しているのです。

ユダヤ人と異邦人の共同作業

『さて、ツロの王ヒラム *[彼は異邦人でした]* は、ソロモンが油をそそがれ、彼の父に代わって王となったことを聞いて、自分の家来たちをソロモンのところへ遣わした。ヒラムはダビデといつも友情を保っていたからである。』（1 列王記 5 章 1 節）

この箇所ではユダヤ人と異邦人との友情が描かれています。ダビデが多くの箇所イエスの象徴であったことを思い出してください。イエスはヘブライ語で“イエシュア・ベン・ダヴィード (*Yeshua ben David* ダビデの子イエス)”と呼ばれました。

『そこで、ソロモンはヒラムのもとに人をやって言わせた。

「あなたがご存じのように、私の父ダビデは、彼の回りからいつも戦いをいどまれていたため、主が彼らを私の足の裏の下に置かれるまで、彼の神、主の名のために宮を建てることができませんでした。

ところが、今、私の神、主は、周囲の者から守って、私に安息を与えてくださり、敵対する者もなく、わざわいを起こす者もありません。

今、私は、私の神、主の名のために宮を建てようと思っています。

主が私の父ダビデに『わたしが、あなたの代わりに、あなたの王座に着かせるあなたの子、彼がわたしの名のために宮を建てる』と言われたとおりです。

どうか、私のために、レバノンから杉の木を切り出すように命じてください。

私のしもべたちも、あなたのしもべたちといっしょに働きます。

私はあなたのしもべたちに、あなたが言われるとおりの賃金を払います。

ご存じのように、私たちの中にはシドン人のように木を切ることに熟練した者がいないのです。』(1列王記 5 章 2 節-6 節)

誰も異邦人のように木を切ることに熟練した者はいなかった。このことに注目してください。

『ヒラムはソロモンの申し出を聞いて、非常に喜んで言った。

「きょう、主はほむべきかな。このおびたしい民を治める知恵ある子をダビデに授けられたとは。」そして、ヒラムはソロモンのもとに人をやって言わせた。

「あなたの申し送られたことを聞きました。

私は、杉の木材ともみの木材なら、何なりとあなたのお望みどおりにいたしましょう。私のしもべたちはそれをレバノンから海へ下らせます。

私はそれをいかだに組んで、海路、あなたが指定される場所まで送り、そこで、それを解かせましょう。

あなたはそれを受け取ってください。それから、あなたは、私の一族に食物を与え、私の願いをかなえてください。』(1列王記 5 章 7 節-9 節) (フェニキア人は船を扱うのに秀でていました)

『こうしてヒラムは、ソロモンに杉の木材ともみの木材とを彼の望むだけ与えた。』
(1列王記 5 章 10 節)

ダビデはソロモンが神殿を建てるために必要とした金と銀を残しました。ソロモンは父から必要なものを与えられ、その後異邦人を用いて、さらに必要であったものを取り寄せました。

『そこで、ソロモンはヒラムに、その一族の食糧として、小麦二万コルを与え、また、上質のオリーブ油二十コルを与えた。ソロモンはこれだけの物を毎年ヒラムに与えた。主は約束どおり、ソロモンに知恵を賜ったので、ヒラムとソロモンとの

間には平和が保たれ、ふたりは契約を結んだ。』(1列王記5章11節-12節)

“ダビデの子”であったソロモンはユダヤ人と異邦人との間に平和をもたらしました。しかし、ユダヤ人と異邦人の間に永遠に続く平和は、唯一ダビデの子であるイエスからもたらされるものです。

贖いの鉱物

『そこで今、私のもとに、金、銀、青銅、鉄の細工に長じ、紫、紅、青などの製造に熟練した人で、各種の彫り物の技術を心得ている人を送ってください。私の父ダビデが備えておいたユダとエルサレムにいるこちらの熟練した者たちもいっしょに働きます。』(2歴代誌2章7節)

聖書の中に出てくる“色”と“貴重な鉱物”は特別な意味を持っています。神殿の奥に進み、至聖所に近づくにつれて、神殿の建築に使われている鉱物の価値は段々と高くなっていきます。最初は青銅であり、次に銀、最も奥には金を用いられています。

青銅は火が付けられる場所にありました。祭壇は青銅で作られ、それは十字架の象徴でした。私たちが神のもとへ行く唯一の方法は、罪の贖いがなされた十字架を通ることにより、ます。

また青銅の祭壇は女たちの鏡から作られました(出エジプト38章8節)。この時代にはガラスはなかったのです。鏡は銅の一種で作られ、顔が反射して見えるようになるまで磨かれました。それは女たちが自分の虚栄心を主の奉仕のために明け渡したという意味です。女たちは自分の栄光を表すものを用いて、十字架の象徴を作りました。

銀は“贖いの代価”といつも関連しています。イエスは銀貨三十枚で裏切られ(マタイ26章15節)、レビ人は初子を銀で贖わなくてはなりません(民数記18章15節-16節)。最後に、神殿の最も奥は金でした。『しっかりした妻は夫の冠。』(箴言12章4節)金は神聖さを表しています。ダイヤモンドは火で生成されます。私たちが「栄えの冠りをささげまつれ」(賛美歌164番 原曲“*Crown Him with many crowns*”)というような曲を歌うときには教会がイエスに冠をささげているということなのです。教会はイエスの栄光となるべきものであって、それは王の頭にある冠——火によって精錬された宝石がはめ込まれた、金の冠となるべきなのです。これが私たちが試練を通らなければならない一つの理由です。宝石となるには火の中を通らなくてはならないのです。

色と鉱物はそれぞれ象徴を持っています。鉱物は黙示録の中に出てくる壁とさまざまな種類の宝石——エメラルドやしまめのう、ルビーなどに関連しています。聖書に出てくる色にも象徴があります。『たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。』(イザヤ1章18節)紫は祭司の

色で、青は王に関係する色です。すべての色がそれぞれの意味を持っています。
ソロモンはこれらのものに熟練した人たちを必要としていました。

『それから、私のもとに、杉、もみ、びゃくだんの木材をレバノンから送ってください。私はあなたのしもべたちがレバノンの木を切ることに熟練していることを知っております。もちろん、私のしもべたちも、あなたのしもべたちといっしょに働きます。

私のために、木材を多量に用意させるためです。私の建てる宮は壮大であり、みごとなものだからです。お聞きください。

私は、木を切り出し、材木を切る者たちのため、あなたのしもべたちのために食糧として小麦二万コル、大麦二万コル、ぶどう酒二万バテ、油二万バテを提供します。』
(2列王記2章8節-10節)

木、麦（穀物）、水、油、ぶどう酒

まずは木について理解しましょう。イエスが盲人を癒したとき、その人は人を見て『木のようですが、歩いているのが見えます』（マルコ8章24節）と言いました。またイザヤ書には『野 *[宣教する場所]* の木々もみな、手を打ち鳴らす。』（イザヤ55章12節）とあり、私たちは『義の樅の木』（イザヤ61章3節）と呼ばれます。『良い木が悪い実をならせることはできないし、また、悪い木が良い実をならせることもできません』（マタイ7章18節）聖書の中で“木”はさまざまな箇所でさまざまなものを象徴していますが、ここでは神の民を表しています。

私たちの穀物（麦）は神の言葉です。それが霊的な食べ物であるからです。『あなたのパンを水の上に投げよ』（伝道者の書11章1節）『わたしが与えようとするパンは…』（ヨハネ6章51節）

さまざまな種類の液体は聖霊をいろいろな側面から象徴しています。イエスは井戸のそばにいた女に“生ける水”（ヨハネ4章10節）を与えるとしました。イザヤ44章3節は“生ける水（湧き水）”が神の霊であると明らかにしています。『これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである』（ヨハネ7章39節）湧き水は聖霊のひとつの側面です。『わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渴くことはありません』（ヨハネ4章14節）とイエスが言われた水は私たちから流れ出すのです。

ぶどう酒は聖霊の喜びを表し、油は聖霊の油注ぎを表しています。聖霊は聖書のさまざまな文脈で、いろいろな液体に象徴されています。

それぞれの得意とすることと資源

そこにあったのはユダヤ人と異邦人との間の平和であり、彼らは共にこの偉大な建造物を建てようとしていました。彼らは主のための家を建築していたのです。

石や柱や木、さまざまな部分はさまざま種類のクリスチャンを象徴しています。ユダヤ人は建築のための青写真を持っていました。御父が御子に何をすべきかを教えられたように、ダビデはソロモンに建築の青写真を渡しました（どちらも“ダビデの子”です）。

ユダヤ人は穀物（麦）を持ち、油を持っていました。また宝石を用意していました。そして金や銀、織物を提供したのも彼らです。

異邦人には人手がありました。また彼らは仕事に熟練した者たちであり、労働力を持っていました。

神殿はユダヤ人のみでは完成しませんでした。また異邦人だけでも無理でした。この神殿を建てるためにはユダヤ人と異邦人の和解が必要だったのです。異邦人なしではそれを成しえず、ユダヤ人なしでもそれは不可能であり、両者はお互いに依存し合っていました。

異邦人のように木を切ることに熟練した者はいませんでした。歴史上で最も多くたましいを勝ち取った人とは誰だったのでしょうか？初代教会の時代からそれはほとんど異邦人でした。偉大な伝道者といえば、ス波尔ジョン、ビリー・グラハム、D・L・ムーディー、ウェスレー兄弟、ジョージ・ホウィットフィールドなどでしょう。“ゴイ（*goy*=異邦人）”のように木を切ることに熟練した者はいないのです。

土台はユダヤ人

それだけではなく、彼らは海を使って木を運びました。聖書の中で“地”は多くの場合イスラエルに関連しています。一方“海”は国々に関連しています。異邦人がエルサレムに木を運んできたのです。レバノンの杉ともみの木は異邦人の象徴です。神殿を構成していた物の大半はこれらの木でした。神殿の割合を一番多く占めるのは異邦人です。しかし、その土台はユダヤ人によって成っています。

建物の土台は地下に作られます。私の祖父母は北イングランド出身でした。私はというと高層ビルの立ち並ぶニューヨークで生まれました。マンハッタンにある高層ビルは千を越えます。ロンドンで一番高いビルでもマンハッタンと比べると何もすごいとは思いませんでした。高層ビルが建設される時、それがどのような建物になるかという絵が建設現場の周りに貼り出されます。それから岩を砕き、地下深くまで掘り下げていくのです。これが何ヶ月も続きます。誰もがもう建物は完成することはないだろうと思いはじめると、突然梁が取り付けられ、夜の間にはそこに建物があるので、どうしてこのように速く完成するのでしょうか？

一番大切なのは基礎を正しく据えることです。100階建ての建物を造るなら深くて堅い基礎を欠かせてはなりません。神は2千年間ユダヤ人を取り扱った後に教会を作りました。とても長い年月がかかりましたが、いったん基礎が出来上がると、ペンテコステの日には何が

起きたでしょうか？教会の誕生です！建物はそこにあったのです。

誰も地下にある土台の石を見ることはできません。100階建てのビルがあるなら、その地下にはとても強固で奥深い基礎があるのです。それを見ることができないとしても建物は基礎無しでは存在することができません。

教会も全く同じです。教会にはユダヤ人によって作られたとても強固で深い基礎があります。ローマ11章にも同じようなことが書かれています。根を見ることはできませんが、それは存在しています。もし根が無ければ木は枯れてしまうのです。神がユダヤ人との関係を終わらせたのなら、教会との関係も終わらせたはずです。復興主義者たちが教えていることは聖書と全く関係がありません。

福音の奥義

ユダヤ人と異邦人は共に働いていました。異邦人は技能を持っており、人手と海を使ってエルサレムへ木を運ぶ能力を備えていました——ここでエルサレムは天にあるエルサレムの象徴です。

ユダヤ人は異邦人に何を与えたでしょうか？青写真と穀物、油（ペンテコステの日にユダヤ人に降り注いだ聖霊）です。

エレミヤ31章31節には『わたしは、イスラエルの家とユダの家とに、新しい契約を結ぶ。』とあります。神はバプテスト派やペンテコステ派と契約を結んだのではありません。新しい契約はユダヤ人と結ばれました。

ユダヤ人は神のことばを異邦人に与えました。つまり青写真を与え基礎を据えたのです。しかし、建物を建てたのは異邦人です。

それは初めから神の計画でした。パウロはこれを福音の奥義と呼び、神の神殿を建てるために、ユダヤ人と異邦人の間の平和が生まれ、和解がなされたのです。これが神が初めからずっと抱かれていた計画でした。

新しいものが来ると古いものは倒れる

教会は“ダビデの幕屋”であるとアモス書で言われています。それは移動式のものでなければなりません。“エジプトから出る”ということは、教会が世から出てきて、聖霊に導かれながら天に至るということを語っているのです。エジプト人はイスラエル人に、後に幕屋を建設するための材料を与えました。それは神はこの世のものを取って、ご自身の栄光のために用いるということです。

神殿は再建されるのでしょうか？何度も繰り返し聖書は**教会が神殿である**と教えています。使徒の働きで信者たちはソロモンの廊で集まっていたことが分かります(使徒5章12節)。ダニエル9章により、神殿は崩壊することが定められていました。その一方で神はすでに

もうひとつの神殿——教会をすぐ隣に再建していたのです。新しいものが来ると古いものは倒されます。

神殿は倒されなければなりませんでした。なぜかというとなりに書かれているからです。『これによって聖霊は次のことを示しておられます。すなわち、前の幕屋が存続しているかぎり、まことの聖所への道は、まだ明らかにされていないということです。』（ヘブル9章8節）

ダニエルによって預言された物質的な神殿の崩壊は紀元70年に起こりました。その預言はイエス自身もオリーブ山において繰り返されたものです（マタイ24章・ルカ21章）。物質的な神殿の崩壊は、ただイエスの体に起こることの反映だったのです。イエスキリストが私たちの罪のために十字架に付けられた後、神殿は崩壊しなければなりませんでした。

タルムードは、贖いの日（ヨム・キプール）に至聖所の前に緋色のひもが吊るされていたと語っています。民の罪が赦されたときはその緋色のひもは色が白く変わりました。しかし、民の罪が赦されなければそれは緋色のままでした。タルムードは、神殿が崩壊する以前の40年間（言い換えるとイエスが十字架に付けられてから）緋色のひもは色が白く変わらず、律法の下で民の罪は赦されなかったと教えています。

神殿は崩壊しなければなりませんでした。なぜならそれは分離を示していて、罪深い人間と聖なる神、大祭司と祭司、祭司と民衆、男と女、ユダヤ人と異邦人との間の分離を表していたからです。

仕えるために救われた

『私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。』（エペソ2章10節）

私たちは天国に行くためだけに救われたのではなく、この世で何かをするために救われました。あなたがユダヤ人ならソロモンの働き人のようであり、異邦人ならヒラムの働き人です。神は神殿を建て上げるためにあなたの働きを用意しておられます。

ネヘミヤ書を見るとその考えが分かります——さまざまな人たちがエルサレムの城壁を再建するために共に働いていました。誰もがこの神殿の中の何かを建てるために救われました。あなたの持っているレンガをはめ込まない限り、その場所には穴が開いています。そのときは他の人の働きをもって、あなたのために用意されていた場所を補わなければなりません。

あなたが新生する前、まだ世が創造される前から、この神殿ですべきことが神のみこころの中にはありました。この世にいる新生した信者の中で、何らかのすべきことを備えられていない人はいません。あなたは仕えるために救われたのです。

イスラエルの国

『ですから、思い出してください。あなたがたは、以前は [これは旧い契約のもので] 肉において異邦人でした。すなわち、肉において人の手による、いわゆる割礼を持つ人々からは、無割礼の人々と呼ばれる者であって、そのころのあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人であり、この世にあって望みもなく、神もない人たちでした。しかし、以前は遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエス … [キリスト・イエスとイエス・キリストは違います。“キリスト・イエス”はいつもイエスが栄光を受けた後のことと関連しています]… の中にあることにより、キリストの血によって近い者とされたのです。キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、また、両者をつ一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました。』(エペソ 2 章 11 節-16 節)

前の幕屋が存在している限り、聖所への道は明らかにされていませんでした。イエスの体が死に渡されたために神殿は破壊されなければならなかったのです。神殿はユダヤ人と異邦人の間の隔たりを象徴していました。イエスが亡くなられたときに、彼はその隔たりを取り去られました。このため隔たりを教えるために造られていた神殿も破壊されたのです。

イエスは私たちの平和

『それからキリストは来られて、遠くにいたあなたがた [これは異邦人のこと] に平和を宣べ、近くにいた人たち [これはユダヤ人です] にも平和を宣べられました。私たちは、このキリストによって、両者ともに一つの御霊において、父のみもとに近づくことができるのです。こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、今は聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。この方にあって、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、このキリストにあって、あなたがたもともに建てられ、御霊によって神の御住まい [ここではヘブライ語の考え“ミシュカン”を示しています。ギリシア語では“カタステノー”] となるのです。』(エペソ 2 章 17 節-22 節)

そこには罪のために壁がありました。『この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。』イエスは彼の体について語っておられました。古いものは破壊されました。新しいもの、ソロモンの廊で集まっていた教会がその代わりに建てられたのです。

イエスの体は十字架に付けられましたが、後に栄光ある体が造られました。教会も終わりには何らかの形で十字架に付けられ、勝利にあって復活するでしょう。イエスと同じパターンです。イエスが亡くなると、異邦人はもはやユダヤ人とは分離されていませんでした。そのために隔ての壁は取り去れなければならなかったのです。

イエスが私たちの和解です。隔ての壁は砕かれました。イエスが私たちの平和です。私たちはひとつになります。インティファダや憎しみがある真ん中で、エルサレムでユダヤ人とアラブ人が共にヘブライ語、アラビア語、英語で「イエスは私たちの平和である」と歌うようになります。

男と女の間の壁も取り去られる

正統派のユダヤ人は次のように祈ります。「神よ、私が犬や異邦人、女として生まれなかったことに感謝します」男と女には違いがあり、それぞれの役割がありますが、古代世界においてユダヤ人は異邦人が与えるよりはるかに高い地位を女性に与えていました。

中東に行けばそれが分かります。もし、ユダヤ教以外またはキリスト教以前の女性がどう扱われていたかを見たいならイスラムの文化を見てください。そこでは小さな女の子が兄弟に虐待されていても誰も何も言いません。エジプトの田舎の村に行くと、男がラクダを壁に押し付けて鞭で打っているのを見ます。ラクダのためにそれをしているのでしょうか？いいえ、それは妻を苦しめるためです。夫はイスラム法のもとに彼女と離婚し、子どもを連れて行くことができます。それに対して妻は何も言えません。夫はただ「離婚する」と3回言えば、法律的に離婚したことになるのです。

その男たちは妻の服を脱がせ、打ち叩くこともします。古代世界のほとんどの場所ではこのように女の人が扱われていたのです。

ユダヤ人は“ハラハー”のもとに女性に権利を与えていました。これはたいていユダヤ教以外の古代世界では見受けられないことです。しかし、キリスト教はほとんどフェミニズム化してしまっています——パウロは女性はキリストにあって同等であり、共同相続人であると言っています。また『愛をもって互いに仕えなさい』と書いていますが、これは夫がかしらではないという意味ではありません。これは妻が共同の相続人であるということであって、夫がかしらではないという考えは極端なものです。

ユダヤ教は異邦人が考える女性の姿より、はるかに高い地位を女性に与えました。しかし、その後教会はまったく極端で違ったものを持ち込んでしまったのです。

夫は妻のかしら

ギリシア人の考えは、すべての男が三人の女をめとるべきというものでした。それはまずそばめ——基本的に性の対象、また愛人——これは知的な満足のため、そして妻——子どもの母でした。聖書に基づくと、一人の女性がこれら三つのすべての役割を果たすことができます。キリスト教の考えは、ギリシア人とも、異邦人より優れていたユダヤ人の考えとも正反対のものです。隔ての壁は取り去られました。

これは私が女性の牧師を認めているということではありません。私はそれに反対しています。私たちはまだ墮落した世に住んでおり、男と女はどちらも墮落ののろいのもとにいます。女性は男性よりも霊的な誘惑にとても弱いのです。それでいて女の人は非常に敏感なので、男の人より容易に聖霊の声を聞くことができます。

夫と妻と一緒に祈ったときにはたいてい妻を通して神は語られます。夫と妻が救われたなら、多くの場合に妻が先に救われます。しかし、女性がより敏感であるために聖霊の声が聞こえやすいことは事実なのですが、他の霊の声も聞きやすいのです。このことのために蛇は女を惑わしました。

女性は生まれつき霊的な欺きに弱くできています。そのために“かしら”という考え方があるのです。**神が言うかしらとは保護のためであり、優位に立つことや支配することではありません。**夫が妻のかしらであるということは、キリストが教会のかしらであることと同じなのです。

神は夫が自分自身を妻に明け渡すことを願っておられます。キリストは模範を示され、教会のために自分のいのちを明け渡されました。一方で、妻は夫の持つ責任と権威を認めなければなりません。それは保護のためであって、主人と奴隸のような関係ではありません。そのようなものは世の考えです。

ユダヤ人と異邦人の間の隔ての壁が取り去られたように、男と女の間の壁も取り去られたのです。

聖職者と信徒の間の壁も取り払われる

次に聖職者と信徒を分離していた壁も取り去られました。私たちはみなが祭司です。「彼はレビ人の祭司をきよめる」とイザヤ書に書かれてあります。私たちはみな祭司であり、王国の祭司です。

サタンは教会を異教化する前に、教会をユダヤ教化しました。ローマ・カトリックは教会を腐敗させた二つのことに基礎を置いています。それは教会のユダヤ教化と異教化です。異教化は主にコンスタンティヌス大帝の後にやってきました。しかし、教会のユダヤ教化はそれ以前に現れました。すべての信者が祭司であるという考えの代わりに、彼らは切り離された祭司制度を再び持ち込み、パウロがガラテヤ人への手紙で警告したように律法の下に戻ってしまったのです。イギリス国教会全体は女性祭司が正しいかという問題で真っ

二つに分かれました。しかし本当に問題なのは、「女性祭司が正しいのか」ではなく、「そもそも“祭司”という役職が正しいのか」ということではないでしょうか。

聖書は信者全員が祭司であると教えています。問題にしていること自体が不要なことなのです。しかしながら、その問題のためにイギリス国教会を去る人が出ています。

国教会の祭司がイエス・キリストの復活を否定し、処女懐胎をも否定し、聖職者たちが公に自分たちは同性愛者であるということを公表し、ジョージ・ケアリー (*George Carey*) が福音派からカンタベリー大聖堂でヒンドゥー教徒やイスラム教徒、まじない師と礼拝を行うのを止めるようにと申し立てされたときも、誰も国教会を去ろうとはしませんでした。彼らはただ聖書的でないことに関してだけ教会を去るのです。(私の宗教に干渉しないでくれ! というように)

サタンが教会を異教化する以前に、サタンはそれをユダヤ教化しました。神の御霊が動いていたダビデの幕屋の代わりに、カトリックは教会の建物の中、“聖体”を入れた“幕屋”と呼ぶ小さな箱の上の祭壇にイエスはおられると言っています。「ここがイエスさまの宿られるところです」と彼らは言いますが、それは律法に戻ることなのです。

ローマ・カトリックはキリスト教をユダヤ教化し、異教化した宗教です。『ああ愚かなガラテヤ人。…だれがあなたがたを迷わせたのですか。』(ガラテヤ 3 章 1 節) 聖職者と信徒を分離しないために、偽りの教えは取り去られなくてはなりません。

幕は取り去られる

また幕も取り去られなくてはなりません。それは聖なる神と罪深い人とを隔てていたからです。イエスは私たちの義とされました。私たちは悔い改めとイエスへの信仰を通して義と見なされたのです。従って人と神との壁は無くなりました。イエスが死なれたのは、ユダヤ人と異邦人、男と女、聖職者と信徒、最終的には聖なる神と罪深い人との間の隔ての壁を取り払うためでした。

イエスが亡くなられたとき神殿の幕は上から下に裂けました。それが内側から始まったことに注目しましょう。神はいつも内側から始められ、次に外側に働かれます。世はその正反対で、外側から始まって内側に行こうとします。神が会見の天幕を作るための青写真を与えられたときでさえも、神は内側から始められ外側の物へと説明をされました。

イエスは新しい神殿を立て、そこではユダヤ人と異邦人、男と女、聖職者と信徒、罪深い人と聖なる神がもはや隔てられることはないのです。

荒らす忌むべきものが据えられる

第二テサロニケ人への手紙によればもう一つの神殿が建てられるのでしょうか? その可能性は大いにあります。しかし、紀元 70 年にダニエルの預言の成就として物質的な神殿が破

壊されたときに、ヘブル 9 章であるように、霊的な事実を反映しているだけに過ぎなかったということを思い出してください。

至聖所へに行くことは前の幕屋が存在している限り、(それは象徴でしたが) 不可能なので。ヘブル人への手紙の中でそれは天にあるものの写しであるとはっきりと書かれています。物質的な神殿の崩壊はただ霊的なものの反映だったのです。

至聖所の前の幕が裂かれるという物質的な出来事が起こったとき、それはただより深い霊的な事実の反映でした。イエスがその代価を支払われたので、罪ある人は聖い神からもはや離されてはいないのです。

もし、実際に神殿が再建され、荒らす忌むべきもの(ダニエル 12 章 11 節)が据えられたとしても、それはただより深い霊的な事実の反映にしかすぎません。

カンタベリー大主教が教会の中で“インターフェイス(信仰の違いを超えた)礼拝”をささげているとき、それが荒らす忌むべきものなのです。それはもう始まっています。

教会の中に同性愛者の聖職者がいるなら、それが荒らす忌むべきものです。主教がイエス・キリストの復活を否定し、三分の二の他の主教たちが彼を擁護しているのを見るとき、私たちは荒らす忌むべきものを見ているのです。

私はいずれ反キリストがキリスト教界で礼拝されるようになると確信を持っています。もし、実際の神殿が再建されその中に像が据えられても、それは本当に起こっていることの反映でしかありません。

ヘブライ大学の考古学者たちがオマール・モスクの地下を掘り、神殿を建てようとしているなら、それはただカンタベリー大聖堂やセント・ジェームス、ピカデリー、また他のニューエイジの影響を受けている教会で起こっていることの反映でしかありません。

神殿は再建されるのでしょうか？ 神殿はもうすでに再建されています。それは私たちです。物質的な神殿が私の懸念するものではありません。荒らす忌むべきものがもうすでに神殿の中に据えられていることを、私は懸念しているのです。